



歌 七 首

佐々木信綱

つるしたる草鞋うごきて驛路の

夏なほ寒き夕ぐれの風

森かげもたましくもるゝ光あり

あまりに闇き吾世ならずや

病める身をこゝに養ふ温泉の三年

よしやいゆとも望める世か

秋風に胸やぶられしはせを葉の

猶さりげなく打なびく哉

竹村の夜半のしらつゆ闇にかちて

やみにぞ消ゆる夜半の白露

打つれし村の若衆がさのさ節

遠くさえゆくおぼる月夜や

志むなしく老て友もわれも

やつれたる哉ともし火の前

修善寺に遊びし折

東 くめ子

ゆかりある名にしおへれば水やすむ

月の桂の川のながれは

蔭ふかき樹の間につりしハンモック

ゆられて眠る稚兒の夢はも